朝日新聞　2007年(平成19年)3月28日　水曜日

認知症は「自分の問題」

群馬大の山口教授　サポーター養成講座

認知症への理解を深める講座が25日、前橋市昭和町3丁目の群馬大で開かれ、医学部保健学科の山口晴保教授が講演した。県内約470人でつくる県作業療法士会が「理解を深め、リハビリの重要性を知ってもらいたい」と主催。厚生労働省が認定する「認知症サポーター」養成講座も兼ね、集まった150人を超える人が熱心に耳を傾けた。

講演では、記憶障害など、認知症患者に表れる「中核症状」を実例にそって説明。なくしたものを盗まれたと思い込む「もの盗られ妄想」などの「周辺症状」は、患者の元々の性格や周囲の環境が中核症状に影響して起きるといい、「元々の性格は変えられなくても、周囲の人のアプローチの仕方で環境は変えることができる」。症状の根底にある原因を探って対応を考える姿勢が大切、と呼びかけた。

受講者には認知症サポーターの「証し」とされるオレンジリングが配布された。

認知症の人が地域で安心して暮らすためには、患者や家族を温かく見守る地域の目が欠かせない。いつ自分や家族がかかるかわからない認知症を「自分たちの問題」と認識することがサポーターの第一歩、とされる。

サポーターは05年4月に始まった「認知症を知り地域をつくる10カ年」の一環で、厚労省が全国で100万人の養成を目指している。県も09年度までに2万人を目標に講座を続け、これまで約4500人が受講した。

講演した群馬大医学部保健学科の山口晴保教授＝前橋市昭和町3丁目の群馬大で